

慈濟 235 ものがたり

慈濟基金會
2016年7月

TZU CHI ● ツーチャー



2016 ● 7

慈濟ものがたり

N O 2 3 5

慈濟基金會

今月の表紙

高屏区慈濟人医会は高雄静思堂リサイクルセンターで健康ケア活動を催し、看護師たちがお年寄りたちの認知症検査を行った。

(撮影・許振峯)



表見返し●

文・證嚴法師／訳・濟運／撮影・楊秀麗

自ら心を清め 愛で道を切り開く

愛で道を切り開き

誠意と情で成就し合うこと

広く良縁を結べば

有意義な人生になるでしょう

自ら心を清め

広い心で侮辱に耐えること

内に修行して実践すれば

人生は厚みを増すでしょう



目次

【社論】	最大の祝福	慈願／訳	4
【特別報道】	高雄の記憶養生クラス		
□養生は発病前から始め、発病後もケアを続ける	済運／訳	8	
□在宅ケアで家族の負担を減らす	済運／訳	22	
【人文風景】	人道的建築の旗手 簡志明(下)	黒川由希／訳	28
【法を聞く心得】	プラス思考で良い縁を結ぶ	呉国禎／訳	40
【台湾茶の味】	「飲む」から「味わう」台湾茶世代	黒川由希／訳	44
【證嚴法師のお諭し】	愛が心になれば妨げになるものはない	慈願／訳	64
【ボランティアアケツチ】	一念を守り 周守一	慈願／訳	76
【大地の守護者】	決して飲酒せずと誓う	黒川章子／訳	88
【納履足跡】	愛の心を広めれば、善の力が倍增する	心嫻／訳	98
慈濟大事記【六月】		済運／訳	106
自ら心を清め、愛で道を切り開く	済運／訳	表見返し	
問答 慮慇／訳 105	漫画 済運／訳	裏見返し	

最大の祝福

◎ 訳・慈願

慈濟^{ツーチー}が創立してから今日で満半世紀を迎えた。四月の末から五月にかけて、台湾全土二十四地域の道場で、ボランティアが製作した手話劇《無量義経》が公演された。ボランティアたちは優美に演じ、その大愛に満ちた演技はあちこちで評判を勝ち得ていた。

優美な中にも力強い動作は、慈濟人が万難を排して世界中のありとあらゆる地域に入って支援していることを表現している。救難の志を堅く持ち、苦の淵にある衆生の済度を願う様子を、音楽に合わせ体で表現している。また、創立当時の困難な時期を表す場面では、皆が深く感動し、励まされる思いにかられた。

た。

慈濟精神の源は一九六〇年に遡る。そのころ證嚴法師と弟子たちは普明寺に借り住まいの身で、苦しい修行のかたわら救済活動を行っていた。そして自分たちの生活が苦しくとも、毎月薬師法会を欠かさずに行い、ケア対象家族を招いて雑炊を炊いてふるまった。米の足りない時はヒョウタンを煮て加えていた。鍋の蓋を開けた證嚴法師は、小さな鍋の中に映っている山河の影を見て、「一粒の米の中に歳月が隠され、半升の鍋の中で山河を煮る」と感嘆の声をあげた。

證嚴法師が慈悲濟世を立願し、修行していた小屋を一步踏み出したその時から、五十年にわたってこの世の善士を集め、現在では世界の至る所でさまざまな慈濟志業が行なわれている。この善の力がゆるぎなく、豊かなものであるのは、勤行と克難の精神が受け継がれ、初心を忘れず志のある人々を続々と引きつけていることにある。

一念は常に感動によって生じる。しかし立願の過程では必ず困難と試練に出会う。この時、法を奉じる者たちは互いに励まし合い、静かに思い初心に帰ることで、その都度暗雲は晴れ、法の船によって渡ることができた。

もしも無私の心で他人を信じる愛があるなら、善の因縁によって絶えず助けが現れることを知っている。《法華経》の中に出てくる大白牛の話のように、どんなに重たくとも皆で力を合わせれば、牛車を引っ張って前進できるのだと会得している。

経蔵を演戯する中で役者たちはそれを深く体得していた。波乱に満ちた壮観な修行の様子を表した場面はこの上なく美しかった。

證嚴法師は常に弟子たちに「千里の道は踏み出した一歩から、一抱えもある大木も始めは小さな種つぶから」と教え励まされている。これもまた慈済の人間行路じんかんこうろの証であり、自分に対しても人に対しても、同じように励ましが必要である。

五十周年記念式典には、多くの外国の元首から祝辞が寄せられ、世界三十二カ国にいる慈済人もお祝いするために帰ってきた。直前まで日本やエクアドルの震災の支援に行っていた人々もいる。毎月定期的にケア対象家族のために治療や散髪、物資の配付を継続して行っている。

慈善活動が日常のように行われていることは、初心を忘れない慈済精神を体現している。讃嘆の声に接しても驕らず、誹謗の声に接しても意気消沈せず、すべてに感謝の気持ちをもつ。これこそ修行者にとって自分に対する最大の祝福である。

高雄の記憶養生クラス

◎文・張晶玫／訳・済運

養生は発病前から始め 発病後もケアを続ける

極初期の認知症患者は、年のせいではなく、病気であることを認識し、積極的に治療を受ければ、病気の進行を遅らせることができる。

医療関係ボランティアで構成されている「慈済人医会」は地域社会をケアの拠点とし、早期発見を呼びかけている。そこでは「記憶養生クラス」を開設して、お年寄りたちの社交人生を活発にし、心身を鍛えることで彼らの明日の記憶を守っている。



●高雄記憶養生クラスでボランティアと家族がお年寄りたちに付き添ってワラビを植えた。緑一色の中、植物が温かさをもたらした。
(撮影・張晶玫)

二〇一四年のアメリカ映画「アリスのままで」は、コロンビア大学心理学教授で言語学者でもあるアリス・ハワードさんの人生を描いた物語である。彼女が五十歳の時、早期発病型アルツハイマー病と診断され、次第に記憶を失っていった。アリスを演じたジュリアン・ムーアさんは精魂込めた演技でアカデミー主演女優賞を獲得した。その時の拍手の音は時と共に遠い記憶となったが、認知症という事実は高齢化社会が抱える直視しなければならぬ難題である。

衛生福利部が認知症協会に委託して行った認知症に関する調査と内政部

二〇一三年末の人口統計を合わせて推測すると、台湾には百人に一人の割合で認知症患者が存在していることになる。

認知症は認知障害症の一種で、大脳皮質神経細胞が徐々に衰え、死滅していくことで認知に問題が起き、やがては患者の生理機能にも影響を及ぼしていく。患者は空間、時間に対する感覚を失い、何度と同じ動作を繰り返しているうちに昼と夜が逆になり、最終的には自立した生活を送れなくなってしまう。

多くの患者とその家族は初め、「歳だから忘れっぽくなっただけで、普通のことなのだ」と思う。患者の物忘れがひどく

なって、日常生活に支障をきたすようになって初めて事の重大さに気づくのだ。患者の世話をする家族は、一日二十四時間、長期的に息をつく暇もない状況に陥る。「認知症」が生活に巨大な陰を落とす中、認知症患者は往々にして見過ごされがちな「存在しない病人」になってしまふ。

軽度の認知障害者を求めて

今はまだ認知症の特効薬はないが、早期発見と積極的なケアで進行の度合いを遅らせることはできる。

認知症は軽度認知障害、軽度認知症、中度認知症、重度認知症と分けることができる。増え続ける研究報告によると、毎年十%から十五%の軽度認知障害者がわずか数年の内に認知症へと進行している。彼らは軽度認知症になる危険性の高いグループである。そして、彼らには同じような特徴が見られる。一、自分は認知症ではない。二、正常な日常生活を送っている。三、積極的に医者には行かない。彼らが認知症になるのを食い止める必要がある。

二〇一二年、大林慈濟病院に認知症センターが設立された。その翌年、医療チ

●高屏区慈濟人医会は高雄静思堂リサイクルセンターで健康ケア活動を催し、看護師たちがお年寄りたちの認知症検査を行った。（撮影・上の写真／林志明・下の写真／許振峯）



ームは地域で、お年寄りたちの極初期認知症検査記録（AD-8）を作成し、早期の患者を発見すると共に治療したり付き添うことで、根源から彼らの明日の記憶を守ることに力を入れている。

雲林、嘉義地域をケアするだけでなく、大林慈濟病院は高雄、屏東の慈濟人医会ボランティアと共に、二〇一四年から各地域の慈濟リサイクルセンターで高齢ボランティアに記憶力の測定を行っている。

大林慈濟病院臨床心理センターの許秋田主任は、「認知症の病理メカニズムとその医療に関して、『事前に見つける』方向

で行動すべきであり、『患者を待つ』受け身体制ではないけません」と言った。予防と進行の遅延という両面から、検査と早期発見によって治療を行うと同時に、様々な社会参与と体力に見合った機能を鍛える活動で認知症の進行を遅らせるよう取り組んでいる。「例えば、元来は六十五歳で発病する場合でも、このような支援によって七十五歳まで進行を遅らせたり、八十五歳で初めて発病することも可能なのです。これによって家庭や社会の負担を大きく軽減することができるようになります」

大林慈濟病院認知症センターの曹汝龍

主任は、積極的に地域資源及び慈済ボランティアとつながって、嘉義県の多くの町に「記憶養生クラス」を開設し、早期認知症高齢者ケアの地域モデルを確立した。

高雄慈済人医会も早期認知症ケアに力を注ぎ、二〇一三年からケアボランティアの養成を始め、地域での検査や異常と認められた人の医療への橋渡し、在宅患者の訪問などを行っている。また、地域にケアの拠点を設立する手伝いや各種クラスを設けてお年寄りの社交生活を活性化し、体力、能力、精神面での適応能力を鍛えている。

今年、高雄人医会は楠梓區と高雄靜思堂で記憶力促進クラスと記憶養生クラスを開設し、大林慈済病院と高雄長庚紀念病院、中正大学体育部が共同で地域のお年寄りの記憶を保つと共に健康を守っている。

家族全員が生活と心構えを変える

高雄靜思堂記憶養生クラスは今年三月に開設したが、四月末までに九回開かれた。四月八日に初めて野外活動を行い、平均年齢七十歳を超えた十人のお年寄りが慈済人医会ボランティアの付き添いの

下、郊外の鳥松リサイクル教育センターで太鼓を鳴らす経験をした。センターのボランティアは前もって甘酸っぱいパイナップル汁粉と香り豊かなエリンギダケの炒め物を用意して待っていた。普段はビニール袋の分類に使っているコンクリート敷きの広場に十個の太鼓が置かれてあった。

お年寄りたちは恐る恐る太鼓の前に輪になって座り、少し強ばった手でバチを持ったが、どうしていいかわからなかった。突然「トン、トン、トン」と七十九歳の曾添福が太鼓を鳴らし始め、「小さい頃、廟の祭りで叩いていたのさ」と得意げに言

った。横から止めるのが間に合わなかった友人の許瑋芸が笑い出し、曾添福の予想外の行動で楽しい時間が幕開けた。

「さあ、バチを高く上げて、私の後について言ってください。『一頭象さん』。続いて力強く叩いてください。トン!」。まだ若い許家楨が先生になって皆で遅いテンポから早いものまで練習した。太鼓を鳴らすのはこのお年寄りたちにとつて初めての経験であり、拍子がはずれるのは仕方ないことである。他人と違った間合いで叩いてしまった時は、間違ったことをした小学生のようにバツが悪そうな笑顔を見せた。しかし、周りを取り囲んで

いたボランティアは惜しみない拍手を送った。

中度の認知症を患った邱お爺さんは妻と息子、娘の付き添いの下、太鼓クラスに参加した。お爺さんは真面目な顔つきで先生の号令に従って口で拍子を数えていたが、手に持っていたバチは空中に止まったままで、打つのを忘れていた。息子の邱芳傑がこっそりと父親の後ろに廻って腰を屈めて抱きつくようにし、両手で父親の手を持って太鼓を打った。お年寄りらは息子の手を借りて元気に太鼓を鳴らすと共に、拍子を一層はつきりと数え出した。息子に抱かれた老いた父親は始

終、無邪気な笑顔を浮かべていた。慈済が和やかな環境を作り、父親がいつも簡単に仲間に入れたから、こんなにも泰然と自在な心でいられるのだと邱芳傑は思った。

いつのことだったか、子供の目には「スーパーヒーロー」と映った父親が子供たちの手を借りるなければならなくなった時、邱芳傑は釈然としなかったことがある。父親が病気になってからは自分の気持ちを調整する必要がある。幸いにも家族は短期間に心を整理し、お年寄りに合った生活をするようになった。彼が中心的存在になり、「どうして言うことを

●高屏区慈済人医会は地域ケア拠点で民衆に健診サービスを行った。ボランティアは55歳以上のお年寄りたちが「AD-8極早期認知症検査表」を書く手伝いをした。（撮影・黄瓊慧）



聞かないの？」という考え方を捨てた。「父が認知症になっていなければ、恐らくこれほど親密に接する機会は無かったでしょう。自分の父親です。父に何かしてあげられて感じるのは喜びと感謝しかありません」と邱芳傑が言った。

明日のことは誰にも分らない

もう一人、脳卒中に罹って十二年になるお爺さんは車椅子に座り、話すこと、左手、左脚、左耳の機能を失った。太鼓の前に座っても無表情で、他の人とも接触しなかった。しかし、横にいたボランテ

イアの穏やかで絶え間ない励ましによって、やっと右手で二本のバチを持ち上げ、叩く真似をした。「お爺さん、バチは右手に一本、左手に一本持つんですよ」。何お爺さんが文句を言う前に、彼の両側にいた二人のボランティアが彼の手を持って太鼓を鳴らし始めた。お爺さんはその動作につられ、思い切って「イーイーアー」と拍子を取りながら太鼓を鳴らすようになった。

曾添福と邱お爺さん、何お爺さんの後ろにはそれぞれ一緒に人生を乗り越えて来た妻たちが座っていた。夫たちは老いたが、彼女たちも老いた。夫たちが発病

してから、彼女たちは誰を恨むことなく世話してきたが、心身共に憔悴している。しかし、鳥松リサイクル教育センターでは、いつも夫の後ろにいたこの女性たちはこの時ばかりは一時的に夫の病から解放され、太鼓棒を持って自分たちも喜びに浸りながら太鼓を打ち鳴らした。

一緒に同行した慈済人医会の葉添浩医師は、リサイクルセンターが珍しく活気に満ちていたのを見て、「太鼓は細胞を生き生きとさせ、気持ちを奮い立たせてくれます。お年寄りたちの笑顔を見るのが最高の楽しみです」と嬉しそうに言った。一人ひとりの顔が午後の太陽に照ら

され、輝いていた。

認知症患者の記憶は美しい蝶の儚い命に似て、いつかは消えてしまう。しかし、一概にそれが悲しいことだとは言えない。この世での毎日をしっかりと生きてさえいけば、蝶のように美しく充実した生命の旅を送れるだろう。

●高雄の「記憶養生クラス」は3月5日から4月30日まで9回行われ、気功やツボマッサージ、太鼓、数珠通し、園芸などを通して、お年寄りたちの認知機能を強化した。（撮影・張晶玫）



大林慈濟病院認知症センター 隣近所のお年寄りをケアする

台湾はすでに高齢化社会である。嘉義大林慈濟病院が世話できる雲嘉地区でも年々高齢化が進んでいる。何年も前、大林慈濟病院神経内科の曹汶龍主任はお年寄りの認知問題と老化現象に気づき、認知症患者の世話をする専門の部門と外来を設立すべきだと考えた。それが起点となって、大林慈濟病院は二〇一二年九月に認知症センターを開設した。

当時は外来だけだったが、次第に認知

症患者に対する世話が家族にとって重荷になっていくことに気づいた。そこで、病院で家族との座談会を設け、協力を申し出た。このような縁で、医療チームは家庭訪問を通して、認知症患者を世話する家族が求めているニーズと必要としている資源の範囲や量をより深く理解することができた。私たちもその過程で家族が世話してきた経験とその方法を学び、それを同じような境遇の家庭に提供してい

る。

認知症を患う人口が増えるにつれ、ケアする範囲と地域が日増しに広がって行った。二〇一三年、認知症センターの曹汶龍主任は衛生福利部の「長期的資源が不足している遠隔地の認知症患者に対するケア計画」を受け入れ、嘉義県溪口郷游東村公民館に拠点を置いた。

私たちはこのような地域サービス拠点は早期の認知症患者にとって効果があることに気づいた。住まいの近くにある音楽や運動、歌、料理や手芸などの活動に参加すると、情緒指数やいらだち指数が改善された。そして、認知障害の進行が

安定し、急速な悪化は認められなくなった。これも私たちが地域に力を入れる重要な後押しになった。

私たちは地域と結合する方法を模索し始め、数多くの専門家にも意見を聞いた。その結果、各地の慈濟支部と地域の村長たちと共同で行う方法に辿り着き、地域での検査や家庭訪問を始めるようになり、少しずつ地域ケアの拠点を増やしてきた。

目下、認知症センターの地域拠点は雲嘉地方から高雄まで八つあり。地域のお年寄りのニーズがあれば、将来、もっと多くの拠点を設けるつもりだと曹汶龍主任は言う。

在宅ケアで家族の負担を減らす

認知症患者や家族は日々、失望感が深まると共にストレスが倍増していく。彼らは助け以上に励ましの声を望んでいる。

主婦の許瑋芸はいつも家の中を塵一つ

なく、窓も曇りが無いほどに清潔を保っている。テラスの植木鉢の植物は葉が全て油を塗ったように光り、棚には彼女と夫の曾添福の慈済に帰依した証書が整然と並べられている。今日の応接間にはピーナッツとビスケットの皿と正方形に切られたバナナとリンゴが盛られた大皿が置かれ、台所ではごぼう茶が温められて

いた。

「故郷から出て来た人が訪ねて来るのかね？」と曾添福はそれらを見ながら、ゆつくりと台所に行き、妻に聞いた。もう何度も同じ質問をしていたので、彼女はそれに答えなかった。彼は「慈済人医会の葉添浩医師と慈済の師兄や師姐たちが来るのよ」と妻が答えても、その一分後には忘れてしまうのだ。

専門スタッフが訪問してアドバイス

もうすぐ八十歳になる曾添福は四年余り前に認知症を発症した。ここ数年は薬で記憶力の低下を抑えており、病状は安定しているように見えるが、側で世話している家族にしか知らないことがある。それはお年寄りの記憶が少しずつ失われ、取り戻すことができないということ。

許瑋芸は夫の行動が全く気にならない

●リサイクルセンターで「家電医師」と呼ばれているボランティアの曾添福は、慈済人医会のボランティアが訪ねて来るのをとても喜んだ。



までには寛大になれない。「どうして一前に言っただけのことを忘れてしまうの？」とか「どうしていつも昔のことを繰り返すの？」と言ってしまう。夫が病気であることは分かっているが、何事も徹底して追い求める彼女は、いつも気が急いで腹が立つが、どうにもならないため、ストレスが頂点に達してしまう。それ故、葉添浩医師たち一行の家庭訪問を心待ちにしていた。

高雄地区慈済人医会は九回、「記憶養生クラス」を開設し、頭と体を使った活動と社交活動によって、認知症のお年寄りの記憶力低下を遅らせようとしている

が、もう一つの目的は患者の世話をしている家族に寄り添うことである。「患者よりも家族の方が大変なのです」と葉添浩医師は常にそう思っている。それ故に、人医会は医師、看護師、ボランティアで構成されたチームが記憶養生クラスに参加している全ての人の家庭訪問を計画をした。その一軒目が曾添福である。

「葉先生、主人が飲んでる薬を見てくれますか？」。葉添浩医師たちが応接間に通され、座って間もなく、許瑋芸は間を置かず聞いた。葉添浩はそれを仔細に見てから説明した。「これはB12で、神経を修復する薬です」「こっちはアルツハ

イマー症に対処する薬で、摂取量が多過ぎると、嘔吐などの副作用が出やすくなります」。

葉添浩医師の説明を聞いて、許瑋芸は「本当です。主人が薬を飲んだことを忘れてまた飲んでしまったことがあり、その後ひどく吐きました。私と息子はびっくりしました」と言った。

葉添浩は携帯電話で薬の表示を全て写真に撮った。そして、「家庭訪問することで認知症の進行過程をより深く理解することが出来ます。慈済チームのケアはそうやって全方的になるのです」と言った。

賞賛と激励で

深い記憶を掘り起こす

「添福師兄、今日は何曜日か分りますか？」と看護師の黃寶燕が試しに聞いてみた。曾添福は長い間考えていたが、結局、あきらめたように首を振った。

「夫はこういう調子です。しばらく前、旧正月の時も、過ぎたばかりなのに、お年玉をあげると言い出して騒ぎました」。許瑋芸は我慢できず、いらだった生活の一部始終を思い出した。慈済ボランティアの陳美月は許瑋芸の気持ちを察して手を握った。「添福師兄、あなたの側に座って

いる人は何と言う名前？」と黄寶燕がリサイクルセンターでいつも彼に付き添っている蔡迺榮師兄を指差して聞いた。曾添福はじつと彼を見てから、ゆつくりと「蔡・蔡師兄。知っているよ」と答えた。

曾添福の答えは再び皆に希望を与えた。時間の感覚がなくなり、現実が分らなくなつたとしても、彼の最も好きなりサイクルセンターと回収された扇風機の修理に関することは彼の頭にはつきりと刻まれているのだ。

薬剤師の陳紅燕は許瑋芸に、何か家事をさせて思考させたり動き回つた方が、何でもしてあげるよりいいのでは、と提

案した。「夫にはできないと思うし、きれいに茶碗を洗えないのが心配です」と許瑋芸は慌てて言い訳をした。それまでは黙って皆の話を聞いていた曾添福は、くると体の向きを変えて妻の額を軽く叩いた。そして、「お前は私の悪口ばかり言う」と言つたのだ。

皆、一瞬呆気にとられたが、すぐに彼のこの仕草に笑い出した。認知症を患つたこのお年寄りは何も分らないのではなく、励ましや称賛さえあれば、自分自身に対して自信を失つて益々、自分の殻に閉じこもることはないのだ。『維持は即ち、進歩』であり、もっと樂觀的になる

べきです」と葉添浩が言つた。

「元々、彼は穏やかな性格で全然怒りません」。許瑋芸は人生を共に歩んで来た伴侶を見ながら、語気の中に愛おしさを滲ませて言つた。たとえ夫が二週間前の「記憶養生クラス」で粘土でイチゴと唐辛子を作つたことを忘れてしまつても、許瑋芸は彼の作品を大事にガラスケースの中にしまっているだろう。これからの歲月の中で、彼がもつと多くのことを忘れるようになっていっても、いつまでも家族にとつてかけがえのないメンバーなのだ。

●曾添福は妻の世話に感謝してお菓子差し出すと、妻の許瑋芸も思わず笑顔に。



人道的建築の旗手 簡志明（下）

交通大学人道的建築実験室の簡志明は、人道的建築の夢を実践するため、農村コミュニティでの建設に協力している。

◎文・劉怡珍／訳・黒川由希／撮影・楊子磊

●人道的建築実験室が建てた新竹県峨眉郷の農村の入り口のオ
ブジェ「Line One」。

現地の材料で土地に合った建築

人道的建築で建てられた建築物の中には、木造、レンガ造りのものもあるが、大部分は竹造である。山奥では、原住民であれ漢民族であれ、竹や木で家を建てる。人道的建築の建材として竹を多く使用するの、竹は事前によく処理しておけば、長持ちするからだ。簡志明は、「今年成功大学で開講した人道的建築科目で、台南市左鎮区のシラヤ平埔族の集落を訪問しましたが、彼らの建てた竹造家は五十年以上維持されていました」と説明する。竹は建設前にまず糖分と澱粉を取り除

き、塩水で煮沸する「去青」と呼ばれる工程を行う。構造設計の際、人道的建築チームは竹の自然損耗の問題も考慮し、建築の外層を耐候性のある人工材料で被覆したり、取替え可能な構造を設計したりするなどの工夫を行う。

台東やネパールでは木造またはレンガ造りの建築だったため、この種の問題を考慮する必要はなく、定期メンテナンスで良好な状態を保つことができた。たくさんさんの集落と協力してきた簡志明は、「集落の人々には、人道的建築の成果を自分の子どものように世話し、保護してもらいたい」という思いを抱いている。

建築をデザインする際には、人道的建築チームは現地の風向きや気候、またそのほかの自然条件についても注意を払う。双龍小学校の「果実のさね」型の人道的建築を例に取れば、この建物の両側の交差するアーチ型の曲面は、谷に吹き降ろす風に対応したもので、これによってどんなに風が吹いても倒れず、また空気の流れもよくなる。こうして伝統的な竹造家屋の風力への抵抗力の弱さという弱点も克服できた。一定の温度空間で、湿度や温度に対する感覚を失っていくのは良いことではない。呼吸できる建築こそ人に気温の変化を感じさせることができる

るのだと簡志明は指摘する。

だが、竹造の教室にはメリット、デメリットもある。「あの教室は防水性が低く、教室に物を置いておくことはできません」と話す双龍小学校の林恵娟前校長は、工芸教室の利点について、「竹編技芸伝承の教室であるということ以外に、子どもたちがいつも遊びに来る秘密基地でもあります」と話す。実は簡志明は建築物の損耗率についても考慮している。「私たちは今、大きく二つの方法を採用しています。雨水が直接接触する部分には人造建材を用いて雨を防ぎ、雨水に接触しない場所には自然建材を使用するのです」。

●台東県海瑞小学校の集落文化樹屋は、生徒たちが屋外で本を読んだり、授業をしたり、宿題をしたり、遊んだりする格好の場所である。杉を建材に、造りはブヌン族の伝統家を改良したものだ。

こうして建材の損耗を減らすのである。

ヒマラヤの麓で建設を行う

人道的建築は台湾で育っているのみならず、海外でも芽を出している。ネパールでは人々は貧しく、農耕による自給自足生活を余儀なくされている。チトワン郡ジュゲヂ村では、拾ってきた薪を背負った二、三人の女性が、遥かに緑の木々



が木陰をなす黄土の道を踏みしめ、壁面が黒白斑の二軒の小さな民家を通り過ぎた。その民家の隣こそ、医療ステーション建設予定の空き地であった。

聯新文教基金会の張滯文執行長は、集落での人道的建築の経験の海を越えてネパールで実践してもらおうと、交通大学建築研究所長の龔書章と簡志明を誘って、ともにジュゲヂに入った。ネパールでは長年医療資源が不足しており、ジュゲヂ村の住民たちは日ごろ山や谷を越え、百三十キロ以上の道のりを歩いて、首都カトマンズの病院まで通わなければならなかった。

簡志明は、現地の建物の状況をこう述べる。「家を堅固にするためには、柱は強く梁は細くなくてはならないのですが、現地の家はどれも梁が太く、柱は細いものでした」。内戦後のネパールでは建築法規が整備されていなかったため、ネパール人道的建築チームは台湾中部大地震後の再建の経験に基づいて医療ステーションの建設を進めた。

ネパールのジュゲヂ村を訪れる一カ月前、交通大学、成功大学、台北科技大学、中原大学、淡江大学、金門大学などのボランティアたちが、交通大学に集まって訓練を受けた。ボランティアたちは試験的

に、レンガを積む方法で新竹市の光明幼稚園の「生態堆肥槽」を作り上げた。訓練の第二段階では、学生ボランティア五名、技術指導員四名、管理スタッフ三名を選び、ネパール人道的建築チームを結成した。チームは短期集中的に二十六日間で、現地の住民に工事現場管理、建材管理、機械使用方法を指導し、コンクリートの製造法、梁柱壁の建て方を伝授した。この医療センターは計画から二年余りかけて完成した。

当初、文化的な差異のため、人道的建築チームは地元の住民とのコミュニケーションに支障があった。「私たちが何を

言っても、ネパールの人々は首を横にふるので、どうしたことかと訝りました」。簡志明はネパールの人の首を横にふる様子を真似しながらこう述べる。しかし実は首を横にふるのは現地では同意の意味だったのだ。その後人道的建築チームはネパールの人々と、英語のできる住民を通してコミュニケーションを取るようになり、問題は解決した。日常的には簡単な英語とボディランゲージで、互いの考えを理解し合った。

海外の地で建設を行うことは苦楽半ばであった。人道的建築チームは、建材を運ぶ際、現地の官僚機構に通行費を徴

収されたり、インドからチベットへ至る道路は一本しかないため、外国企業がトレーラーで運送する時、牛や人にぶつか

●交通大学人道的建築実験室の学生たちが構造を設計し、模型を作り、竹の構造の中の照明をテストする。



る交通事故を起こすと道路が封鎖され賠償を求められるといった、多くの困難にぶつかった。病気も手ごわい敵であった。聯新文教基金会のボランティア診察チームが現地に駐在している間は、病気になる人道的建築チームのメンバーも診療を受けることができたが、ボランティア診察チームが帰ってしまうと頼れるのは薬のみだった。しかし身体的にはどれほど大変でも、精神的には満たされていた。簡志明はこうした環境の中から精神を潤す方法を見つけ出した。「一日中くたくたになるまで働いた後、夜に私たちは吊り橋の上に横たわって星を見上げ、感想を

●人道的建築の現場は、メンバーと現地の住民、工芸の職人たちとの交流学习の場である。

言い合いました。こうするとたちまち心が落ち着いたものです」

人道的建築の一案件の平均費用は五十万円（一元約三〇三・五円）で、人道的建築に協力した多くの教師や学生たち、あるいはNGOなどは募金活動を行い、不足した部分は自らのポケットマネーで補っていた。二〇一三年、台湾人道的建築協会が成立、執行長に就任した簡志明は、協会のメンバーと一般企業の運営方法で人道的建築を発展させることを



話し合った。易しいところから難しいところへ、都会の人々に実際に体験してもらおうと、協会は昨年の夏休みに木工と家具の製作クラスを開講した。「一日で応募者の定員に達しましたよ」。簡志明は独立独歩というこのやり方は試す価値があると話す。

人道的建築、愛の波及効果

近年、より多くの大学の教師、学生たちが人道的建築チームの隊列に加わっている。台北科技大学が「果実のさね」計画を継続しているほか、交通大学の「ス

マートライフと人道的建築空間」、成功大学の「人道建築」など、これらの大学の教師たちは自発的に人道的建築関連の科目を開講している。簡志明はこれらの大学の取り組みをサポートし、農村やコミュニティと現状や設計ニーズについて意見交換し、学生たちが住民とともに討論し、力を合わせ、実際に建設に参加することを呼びかけている。

簡志明も様々な大学との提携の中で、貴重な収穫を得てきた。例えば成功大学教員の方雅慧はコミュニティ建設の経験が豊富で、簡志明が初めて学生を連れて見知らぬ集落を訪れた時には、彼女から

●人道的建築は現地の状況に応じて、コミュニケーションと互助の基礎の上に必要な資源を投入する。現地の文化と住民のニーズを重視し、伝統文化と新建築を共生させる。

コミュニケーションのコツを学び、ゲームなどを通して、教師や学生と住民との間の距離を縮めるよう工夫をした。

交通大学建築学科の許倍銜助理教授は、簡志明についてこう話す。「彼は無鉄砲で、理想家です。人道的建築がどれだけ困難で複雑なものか、考えていないのです」。建築に関わる問題は、人力や金銭だけではない。コミュニティ内の文化への配慮、意見の調整も必要で、これに



は何カ月もかかる時もある。「私が集落で住民とニーズや設計について相談すると、彼らはゆっくり時間をかけてやればいい、と言います。しかし大学で人道的建築の先生方と建築技術について討論する時には、進度をスピードアップしなくては、という意見が出ます」。人道的建築を進めるペースについては、簡志明は今も模索中である。

「人道的建築は私の建築に対する愛を投影しています」簡志明は初志を守り、情熱を抱き、多くの人々の協力の下、台湾国内や海外で永続的な公共空間の建設を進める。作家の九把刀は、かつて自らを

励ます次のような言葉を記したことがある。「言えば笑われるような夢こそ、実行する価値のある夢だ。たとえ転んだとしても、その姿はきつととても豪快なものだろうから」。必要とする人のために家を建てる、これは夢物語のような言葉である。しかし簡志明は転ぶことを恐れない。彼が恐れるのは前進しないことだ。「一つ一つの建設が成功するかどうか考えたことはありません。私が考えることは、どのように歩み続けるかということです。歩みを止めなければ、自然と物事は進んでいくのです」

(経典雑誌212期より)

プラス思考で良い縁を結ぶ

一念發起し、聞いて心地よい話だけをしよう。
そうすればいつも衆生と善い縁が結ばれ、自分も法の悦びに満たされる。

この日、證嚴法師が諭された内容は『法華經信解品』であった。「仏の教えに従って、大菩薩のため、諸々の因縁や様々な喻えを以て、わずかな言葉づかい少し気を配ることによって最高の悟りを話す」ことである。證嚴法師は、「すべての法は『因縁』という二文字に包括されているから、私たちは心の畑を耕す農夫となって、衆生と良い縁を結び大切にしない」と諭された。また、「良い縁を結び、知恵を得て何事も善に解釈して世の中のことに対

すれば、全てのことは法になります」と諭された。

證嚴法師は 衆生と良い縁を結ぶことの重要さを常に教えてくださっている。私もこの教えを心に、実際の行動に実践したいと考えている。

ある日、地下鉄に乗った際に、知的障害者の職員が雑巾で一生懸命にエスカレーターの手すりを拭いていた。その真剣に働く姿に感動した。昔の私なら、心の中で感動しつつも黙って通り過ぎただろうが、今回は心の中で、これは衆生と良い縁を結ぶ良いチャンスではないかとピンと来た。

それで、私は足を停めて、彼に笑顔で声をかけた。「ありがとう。とてもきれいに拭きましたね」。すると意外にも彼は大変嬉しそうに感激した様子で私の後をついて来て、一緒にエスカレーターを降りた。そして、彼は私の目の前で手すりを拭いてみせて、「このようにしっかりとやらなければきれいにならない」とつぶやいた。私は「そう、すごいね」と笑顔で彼に答えた。エ

スカレーターを降りてから、彼は手を振って別れの挨拶をしてくれた。その時、私の目に涙が込み上げてきて、さっと背を向けてそこから離れた。

また、ある日レストランで食事していた時、ウェイターが間違って注文とは異なるスープを運んできた。昔の私なら、優しい声でウェイターに「注文と違うよ」と言ったが、今の私は間違ったものでもそのまま食べてしまう。何分か後にウェイターが慌てて走ってきて言った。「申し訳ございません。先ほどご注文のものとは違うスープを運んでしまいました。今すぐ新しいものを持って参ります」。だが、私は、「持つてこなくてもいいですよ。このスープも美味しかったよ」と答えた。

彼はホッとしたように大きく息を吐き、重荷が降りたかのように去った。彼の姿を見た私は、これで彼は上司に叱られないだろうし、あの料理代を賠償する必要もないだろうと思った。最も重要なのは、彼はこの間違いによっ

て悔やんだり悪い気持ちにもならないことだ。こうであれば、両方とも良い気持ちになるのではないかと思った。

一念を発起し、プラスの面を考えるだけで、いつも衆生と縁を結ぶことができる。また私自身の中にも感謝の気持ちが生じている。なぜならば、證嚴法師の論しをよく聞いて深く理解し、信じているので、人々と広く縁を結ぶことができるし、自分もまた法の悦びに満たされるからである。

「台湾茶の味」

「飲む」から「味わう」

台湾茶世代

太古の昔、植物探しの名人神農氏が草むらから発見したという茶。

幾千年の間、のどの渇きを癒やすため、薬や嗜好品として、

修行のためなど、千差万別の役割を演じてきた。

茶は生活を豊かにし、心を清め輝かせる。

茶を飲めば、人と茶の対話が始まる。

◎文／潘美玲（経典雑誌原稿収集担当者／訳・黒川由希）
写真／安培渥（経典雑誌写真収集担当者）



そよ風が吹く。大きな鉄瓶の注ぎ口にはカラーのプラスチックカップ

プ。心地よい休息の一時だ。大樹の下に静かにたたずみ、道行く人に笑顔で茶をふるまい、渴きを癒やしてもらう。美しい心と一緒に手渡された一杯の茶に善意が込められている。

台湾の茶の消費量は年間四万トンを超える。お茶はどのように飲まれているのだろうか。そしてあなたはどこでお茶を飲んでいるだろうか。



嘉義茶屋の茶と暮らしの美学

三月初め、豚小屋を改築した「眷茶屋」けんぢややの桜が満開になる頃、太和村の人々は桜の下に茶席を設け、のんびりとおしゃべりを楽しんでいた。

太和村は阿里山北道（162甲線）に位置する茶の郷である。休日ともなれば観光バスに乗った中国大陸からの観光客がどつと押し寄せ、経済を潤している南道（台18線）に比べ、北道の村々はずっと静かだ。

二〇一三年初め、太和村は「家々に茶席、どこにでも茶屋」活動を立ち上げた。

茶の郷の住民は昔の豚小屋や鹿小屋を独特の風情ある茶屋に改築した。子供からお年寄りまで、熱心に陶芸を学び、自分で

ろくろを回して茶壺（急須）や茶杯（茶碗）、茶盤などを作る。中には我が家の茶席をより芸術的にと家の裏庭に窯を造ってしまった人さえいる。

建築グループ「自分で積む」のメンバーには村人のほか、陶芸家の蔡江隆氏、李俊蘭氏、陳正哲教授もボランティアで参加している。茶屋は地元の建材だけを使い、牛おじいさんから地元の建築工法の指導を受け、またお金で人を雇うのではなく、伝統的な農作業の互助の形を活用

して、近所に口頭で呼びかけ、暇がある人に手伝いに来てもらった。

「近所の人たちは暇な時にあつちを少し、こつちを少しという形で作業しました。急いで完成させることよりも、みんなと一緒に参加するというプロセスが重要なんです」。主要メンバーの一人の麗芳さんはこう言う。「大事なものは、やっていて楽しいということですよ」

また、七十年の歴史をもつ鹿寮茶屋は、昔、鹿茸ろくじょうを切り取っていた頃の木の窓や鹿の糞を積んでいた地下室を残すように設計された。米ぬかに石灰を加える伝統工法で塗られた土壁が、逆にモダンな美

を生み出している。過去の産業遺跡は風流な村人の茶飲み場に様変わりし、今では農作業だけでなく、美が暮らしの中に溶け込んでいる。

茶が太和にもたらした変化は、収入だけではない。茶を通じて、人と自然が結びつき、魂も清められた。

太和村は二〇〇九年の台湾南部水害の被災地だ。被災後、多くの茶農家が茶への向き合い方を変えた。簡嘉文さんは従来の栽培方法をやめ、茶を友人と見なし、天地を敬愛する気持ちで、黙々と自然栽培種に植え替えた。

「自然の生命力に寄り添い土地を壊さ

ないお茶であれば、それはいいお茶です」と話す簡さんの土地を大切にすることに敬服するのはもちろん、自力で茶屋まで立ててしまった才能には心底感服させられる。廃棄された木材や鉄、拾ってきた石や古物でできた小さな木造家屋は茶畑に沿って建てられ、室内には日本式の茶炉、石積みのある、手書きの絵、木彫、美しいデザインの照明が置かれており、限りなく創意工夫が凝らされている。しかしながら、簡さんはいつでもこう謙遜する。「誰でもできますよ。レゴやジグソーパズルで遊んだことがあるでしょう。原理は似たようなものですから」何もほしがらず、



●嘉義の太和茶屋で簡嘉文一家が週末を楽しむ（下図）。自由で奇抜なデザインの太和茶屋は、友人から「ハウルの動く城」と呼ばれている（右図）。



それでいて暮らしには潤いがある。簡さんは口数こそ少ないが、一言一言に深みがある。茶の話をする時、中にはひけらかすような話し方をする人もいるが、簡さんの話には全く誇張がない。彼は心の内に向き合っている。だからこそ暮らしの中にこんなにも多くの妙味を生み出すことができるのだろう。

都会のオアシスを探して

茶を飲む場所は、心が安らぐ場所でもある。

移民の歴史であった台湾社会では、茶

文化にも多様な文化が影響を与えている。中国沿岸から伝わった潮汕工夫茶や江南文人茶の風雅に加え、中国大陸から大勢の軍人・民間人が台湾に撤退してきたことで、島にはさまざまな茶文化が共存し蓄積されるようになった。島内経済が発展すると、コンテスト茶、高山茶など台湾の茶業も隆盛となり、それに従って茶芸も流行し、茶文化は百花繚乱の様相を呈した。

そびえ立つ高層ビルに挟まれた茶館「無為草堂」の主人である涂英民さんが二十六年前に開業した当時、付近は田んぼや泥道だった。それが今では高層ビル

が建ち並ぶ。朝、目が覚めると、まず自分のために茶を入れる。茶を愛し、芸術をたしなむ彼は、地価の高い中心街で茶館を経営することにこだわっている。それは、この弱肉強食のコンクリートジャングルの中でストレスにさらされている現代人にとって、静かに一息つける空間になってほしいとの思いからだ。

伝統的茶館の衰退は、台湾茶の没落を象徴しているのだろうか。「治堂」の主人何健さんの見方は違う。「台湾の伝統的茶館は十年の最盛期があり、その後、スペース確保の難しさと人材の敷居の高さから次第に没落していきました。しかし消

失したように見えて、実は反対に広がりを見せているのです。お茶を取り入れることで暮らしに潤いを与えたいと、お茶を学ぶ人は増えてきています。確かに茶館でお茶を飲むのは流行しなくなりましたが、家に喫茶スペースを設ける人はだんだん増えていきます。茶芸は家庭に入り、毎日の暮らしに根付いているのです」

時代とともに歩む若い茶世代

Tea or coffee? これは現代人の多様な選択肢の一つだ。次の世代の子供たちも、茶を飲み続けるだろうか。飲むとし



●繁華街にある無為草堂は300坪余りの庭園があり、フランスミシュラン観光ガイドでも推薦されている。(撮影/楊子森)

たらどんな茶なのか。

一九八三年に最初のバブルティーが売り出された。劉漢介は台湾の冷茶業の先駆者である。しかし彼は「お茶に氷を入れるのは私の発明ではありません。宋の蘇軾の孫蘇籜は、当時地底の水室に氷を蓄え、暑い夏には冷茶をつくる習慣があったことを歴史書に記しています」新世紀、冷茶は明らかに現代人の支持を得た。台湾を見渡せば、十坪余りの冷茶スタンドが街の至る所に建っている。主計総処

の資料によると二〇一五年現在、台湾にある冷茶スタンドは一万七千五百店以上。市場規模は年間で約八百億元だ。台湾では年間十億杯以上、一人あたりにすると約四十四杯の茶がこのような店で買われ、飲まれている。

三十歳で「京盛宇」を開業した林昱丞さんは、台湾の若い茶世代だ。創立当初「茶のスターバックス」になると豪語した林さんは、六年後の今も品質を守るため伝統の紫砂壺を使って手で台湾茶を入

●一九四九年に開店した双全紅茶は、台南最初のテイクアウトティースタンドだ。



●京盛宇は紫砂壺で入れたティクアウト茶に、伝統の茶と現代生活の間の均衡点を見出そうとしている。（撮影／楊子磊）

れ、百元前後で売る。安いドリンクスターンドが山ほどある台湾で、自分のニッチな市場を見つけたようだ。

大学の時に授業をサボって出かけ、目の覚めるような素晴らしい台湾茶を味わってから、彼は心底台湾茶に惚れ込んでしまった。「茶は気持ちを落ち着かせ、人と人との距離を縮め、貴重な語らいの時間を生み出してくれます」日本流のミニマリストである彼は、お茶を好む理由もこのようにシンプルだ。

若者は茶よりもコーヒーを飲むのが当たり前という時代にあえて台湾茶を広めようとする彼は、自分の行為は「アフリカで靴を売る」ようなものだと言って笑う。自分の茶探しの経験から、彼は今日の茶芸の敷居の高さ、決まり事の多さ、費用の高さが、人々を尻込みさせているというのを身にしみて知っている。製茶の専門用語が非常に多いことも、若者を茶から遠ざけており、まるで焙煎が何分目であるか分からなければ、その茶を飲むではないかのようなのだ。しかし、茶を飲むのはシンプルなこと、知識のプレッシャーがあつてはならない。さもない



ば若者は怖じ気づいて台湾茶の文化から離れてしまうだろう。彼はこんな風に考えている。

金華街上の「Chiao 茶沙龍」の現代的でもあり古典的でもある空間に、人は目を輝かせる。利発そうな陳薇巧さんは、年齢は若いが茶歴は長い。茶は彼女の生活にとって重要なことだ。フランスではお酒をたしなむことはおしやれなのに、なぜ中国で茶を入れ、茶を味わうことは年寄りしかしないことなのだろう。彼女はこんな疑問を持っていた。ティーサロンの設立コンセプトは、若者に茶というもう一つの選択肢を提供することだ。茶を

若返らせようというのではなく、違った方法で茶を表現する。彼女は、茶は昔と同じである必要はなく、若者の活力を注げば現代文化にもなると考えている。

残念なのは、台湾の若者にはお茶を手軽に飲める環境が整っており、さまざまな茶文化に触れる機会があるにも関わらず、西洋や日本、韓国ばかり追いかけて、伝統文化についてはよく知らず、大切にもせず、外国人に台湾茶をどう紹介したらよいのかも分からないことだ。そのため、ティーサロンは文化に根ざしたものにしたいと考え、お茶教室を開催して茶の普及や共有につとめている。学びに来

する固定観念を打破したいと、茶のある暮らしを今の若者の言葉で語っている。麗水街の不二堂は「コミュニティ・ティーハウス」の概念で、「混茶」遊びを勧めている。茶と茶だけでなく、酒や花、フレーバーを茶に混ぜて、自分の好みのオリジナルティーを作れる。「楽しみ方だった一つの基準しかないのはおかしいと思います。元の味をコピーしろというのはある種のプレッシャーです。ここでは、自分の好きな味を探すことで、茶を通して自分自身と対話してほしいと思っています。なんです」彼は新世代の茶文化には無限の可能性があると考えている。

るのは三十歳前後の若者だ。ある人は商談の時、お茶の方が酒よりも話がうまくいくため、仕事のつきあいで必要だという理由で参加している。将来開く店のメニューに茶を取り入れたいと学びに来る菓子職人もいれば、今流行の家庭内喫茶スペースに対応するために学びに来るインテリアデザイナーもいる。「伝統茶は『大山にぶち当たった』感じがする！」、ある学生の言葉は正鵠を射ている。畏敬の念があるだけで、そこから中には進めないということだ。

茶器製作から茶館経営に転身した「陶工房」創設者の林栄国さんも、伝統茶に対

「手軽な茶」は若い世代の新しい選択肢である。「治堂」の主人何健さんもそれは認める。しかし彼は色を正してこう話す。「茶には本当の味があるということは忘れないでほしい。手軽でもいいが、粗末ではいけない。気軽でもいいが、適当ではいけない」

「水で心を澄ませば、茶は法を体现する」。茶はもともと内面の修行である。茶道であれ、茶芸であれ、あるいは茶禅であれ、背景にある文化思想こそが茶を機能（飲料）から脱皮させる要素となっている。そうでなければ、茶である必要はなく、別の飲み物でもいいのである。



●教育は人類の希望プロジェクトだ。静思茶道は茶の美学と品格で無言の説法をする。「茶の水で法水を汲み、茶会で社会を和やかにする」。清浄な心は物事の源泉である。(撮影／支炳勝)

茶文化の種

「いらつしやいませ！」それまで運動場を駆け回っていた小学生たちは、来客を目にするとすぐに立ち止まり、丁寧にお辞儀をして恥ずかしそうに挨拶した。この日、太和小学校では週一回の茶芸教室がにぎやかに開かれていた。辺鄙な梅山郷山区に位置するこの小学校の全校児童はたった三十七名。児童数が足りず合併の危機に直面したこともある。九割以上が茶関連の仕事に従事する梅山郷では、保護者のほとんどが茶農家か製茶業に従事している。茶に育てられた子供たちは、

茶に対して特別な感情を持っている。

知育偏重の風潮の中で、茶芸文化をカリキュラムに取り入れるのは容易ではなかったが、始めてみると子供たちには目に見えて変化があった。二人の男の子を育てる陳さんはこう言う。「山の子供は言うことを聞かず、じっとさせるのが難しかったんですが、お茶を学んでからは落ち着きが出て、ずいぶんおとなしくなりました」創意あふれる茶席に小さな茶人が姿勢を正して座り、作法通りにお茶を入れ、うやうやしく勧める。周沛玲校長はこの三年の間に奮起湖、沼平駅、故宮南院でも茶芸を披露させた。山の子供た

ちが外国からの観光客の前で披露するのは、茶を入れる過程だけでなく、彼らの自信でもあるのだ。

茶を正式なカリキュラムに取り入れている学校には他に慈済大学がある。授業を担当するのは茶芸のベテランの李六秀先生。幼少から茶の一家に育った李先生は、父親からしつけ代わりに茶芸を教わり、知的で気品ある穏やかな女性に育った。李先生は授業中、物腰柔らかな口調でこう話した。「茶とは心を浄化する法門です。慈済では茶芸ではなく茶道と呼びます。静思茶道の背景には一つの思想体系があります。心で茶を飲み、心を伝え

るのです」静思茶道は作法の中に仏法の六波羅蜜、すなわち「布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧」を融合し、作法を日常に実践し、人と人との融和と美を実現している。

ふるまい茶

茶の初心に返る

「ご飯食べた？」「お茶でもいかが？」。これは台湾人の標準的なあいさつだ。イギリス人が顔を合わせたら「天気」から話が始まると同様である。一杯の茶を通じて、台湾人の人情味の「糸口」もゆ

つくりと引き出されてくる。

海拔三百五十六メートルの柴山は高雄人の奥庭である。三百ヘクタール余りの開けた後背地を、毎日千人もの市民が朝晩散策に訪れる。自然発生的な「ふるまい茶（奉茶）」がこの郊外の小山における最も美しいふれあいの風景となっている。三カ所のあるまい茶スポットには、ほぼ二十四時間温かいお茶が用意されている。山を登って汗だくになった後に飲む

●高雄柴山のふるまい茶の伝統は1992年から現在まで続いている。台湾で最も美しい文化風景であり、台湾ならではの人情味を一杯の茶から実感できる。



す。ふるまい茶の文化は台湾独特の人情文化なんです」と話す。

今日の台湾では、一人当たりの年間の茶の消費量が二キログラム近くに上る（二・八キログラム）。これはイギリス（一・九キログラム）に次ぐ量で、日本（一キログラム）や中国大陆（〇・八キログラム）を上回る。つまり、台湾は茶の消費大国と言っても過言ではない。台湾の喫茶の歴史をさかのばれば、初期の茶は完全に外



●浄斯茶書院で若い学生が静かに茶芸を習う。茶を学ぶことは心を修めること、それにより感覚も研ぎ澄まされる。人文の奥底を体得し、茶の静かで平和な境地に至る。

茶は、まるで甘泉のように喉と心を潤す。

ふるまい茶の起源は昔の民間のお礼参りの風習である。現在では一日百桶の水が、茶を入れるため山上に担ぎ上げられる。それが毎日のことなのだ。ボランティアにとつてはこの善行がすでに日課となっていて、多くのボランティアが「たいしたことではありません」と話す。地球市民基金会ボランティアの柯耀源さんは、「これが台湾人の愛すべきところでは、」

貨獲得のための商品であり、平民の多くは茶を買うことはできなかった。台湾茶の輸出が衰え、内需の拡大へと転換したことで、台湾人が徐々に製茶に長け、茶を知り、茶を飲み、茶を発展させるようになったのである。

茶は社会を如実に反映している。茶を飲むことは何気ない日常であり、同時に美しい生活芸術の創造でもある。暮らしに感謝して茶を飲み、茶の初心に返ろう。心のあるところに、茶もまたあるのだ。

（経典雑誌215期より）

【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林淑女



愛が心になれば 妨げになるものはない

怨み心に多くのしこりができると

苦になる

愛の心はひろびろとして

何の妨げもない

怨みを愛に転じると

悪も善に転じられる

人生を広々とした大空のようにしよう

米国で六歳になる男の子が、授業の時に映画を見ました。人々が大量のプラスチックのゴミを海に投げ込み、海を汚染

し、海の中に生息している魚たちが誤って食べていることを知り、男の子は悲しくなりました。放課後、迎えにきたお母さんと家に帰る途中、泣きながら、「人間はいつも地球を壊して本当に馬鹿だね。僕は早く大きくなって地球を護るんだ」と言いました。

お母さんは、環境保全のポスターを作った皆に分かってもらいましょうと言いました。でも男の子は、「それだけでは足りないよ。道ばたに立って皆にむやみにゴミを捨てないよう宣伝しよう」と言いました。お母さんがこの会話を録音して、ネットにのせると、千七百万人

の人がそれを見て、感動したという投稿もたくさんありました。中には「自分が恥かしい」と言う人もいました。

子供の心は少しも汚染されていないため、清浄な本性には善念が容易に啓発されます。この子供は発心だけでなく、行動に移そうとしています。大人にこんな勇気があるでしょうか？

古の人は、「人は天理によらなければ、天地は甲子（十二支）の通りにはならない」と言いました。現在の人は暗やみに閉ざされているように是非をわきまえず、欲念のままにただ目の前の経済的利益だけを求めて、開発は止まるところ

を知らず、地球を破壊してすべての生態が失われています。

過去の四季は明らかでしたから生態も明らかで、全ての物はそれに依存していました。秋ともなれば葉は色づき、渡り鳥たちは南に飛んでいました。現在は地球の温暖化によって、北極では十萬年以上も覆われていた氷の層が溶け始めました。海面温度が上昇すると、海水温度も高くなって気候は極端になり、生態は乱れ、草花樹木、五穀の生長に異常を来たします。

今年の六月、北海道では稀に見る降雪、フランスでは百年来の洪水、世界の

米生産大国といわれるベトナムは深刻な旱魃による不作が起きました。これらは四大不調によって、世界の災難が日増しに激しくなっていることが原因です。

まさにあの男の子が言うように、「人類は自分のやっていることを知っているのだろうか」と、私たち一人ひとりが自分に問いかけなくてはなりません。人類は目先の利益のためにやりたい放題やって、自分が負うべき苦果を全人類に受けさせているのです。

「千年の暗やみも一灯で明るくなる」と言うように、人々には本来清らかな本性が具わっています。細心に法を聞き体

得して生活の中で運用して、誤った行為を改めることです。その心と行為を調整すれば、地球や生命を救うことは不可能ではありません。

地球の温暖化は急を告げるメッセージなのです。その命を救うには、省エネ、二酸化炭素の削減、素食の実施が有効な手立てです。しかし、一部の人間による行いと力では足りず、社会大衆の認識が必要で、共に行動を取らなければなりません。

人類は口欲を満足させるため大量の家畜や家禽を飼育していますが、そのために餌を消耗し、動物の排泄物に含まれ

る温室気体がさらに地球温暖化を加速させています。動物たちは囲いの中で一生を過ごし、最後には殺されて食用になります。世界で一秒間に千七百頭以上の動物が命を落としているのは、非常に残忍なことです。

飼育せず、殺さなければ、動物は自由自在に生きられます。自然に命を全うさせることは、生命を尊重するのみに止まらず、二酸化炭素を削減し、地球温暖化を緩めることになります。殺生をせずとも、素食で栄養は充分に足りります。口の欲を抑えると、心身が清くなります。

人類の欲念は大地に重病を背負わせ

細心に法を聞き

誠意をもつて法を説く

身をもつて

敬虔誠心に法に勤め励む

南アフリカの慈濟ボランティアは五月を「仏陀生誕月」として顕彰しています。現地の黒人の菩薩たちは九百三十キロの道のりを歩いて、十一地域、十二カ所の食事提供所で、民衆に浴仏の儀式とそのいわれを教えました。仏恩に感謝、父母の恩、衆生の恩に感謝するよう説きました。そして病に苦しむ人の家に入って、浴仏（病苦の人を仏と見て体を洗

ました。そして、その地球を治療できるのも唯一人類しかいません。皆が菩薩心を起こして、心の内に光明と智慧を灯すように願っています。日常生活の中では自然に回帰して節水、節電してエネルギーの消耗を抑え二酸化炭素の削減に努めましょう。そして行動を以って衆生を愛護し、大地を保護して、一つの灯明から次々に無数の灯明に明かりを点すようにしましょう。人々の心に灯火を照らすと、大地の群生をも照らすことができます。

う）を行い、病人の体を洗ってあげ、家の整理もしてあげました。

ある時、一人の病人が教会へやって来ました。ボランティアはお米をあげた後、講堂に案内して椅子に座らせ、牧師の説教を聞いてもらいました。それから、牧師は信者の了解を得て、仏像を安置し仏に花を供え、彼女にも浴仏させました。信者一同は讃美歌を歌い彼女を祝福しました。これが愛の共鳴であり、また特別な浴仏式典でした。

レソトの黒人菩薩は国を超え。パサナの人たちに浴仏の指導をしました。ミニバンを浴仏台にして飾り、同じように浴

仏と献花の儀式を行いました。アフリカの大地のボランティアたちは天を戴き、野花を採って酷熱の太陽の下で秩序ある荘厳な浴仏を敬虔に行っていました。仏はどこにもおられて、どのような所であつてもそこが道場です。

どんなに貧困な環境にも「生を済度する哀れみの大願」が現れています。彼らは大衆に身を以って説法し、過去の物資の欠乏だけでなく、多くの煩惱、人との争い、苦しい生き方を懺悔していました。今では仏法によって心を洗い、心が開くと、苦がなくなりました。人との対立がなくなっただけでなく、争いを解く

こともできて、力を合わせて苦難の人を助けています。

仏を拝む時で、最も大切なことは尊い謙虚と慈悲平等の心、それに学んで教える具体的な行動に移すことです。アフリカは台湾から遥か彼方にあつて法を聴くことは容易なことではありませんが、この黒人菩薩は法を聞いて心に留め、生活の中や群集の中に運用しています。

心の中に怨みがあると、もめごとが多く苦しくなりますが、心に愛があるとさへざるものがなく、すがすがしくなります。心を変えたと悪も善に転ずることができ、仇を愛に転ずると人生は天空のよ

うに闊達になります。人と人との間に障害なく垣根を越えればよい事柄は多いものです。良い話を広く伝えてゆけば、社会全体が温かで平和になります。

無常を警告し善を見て喜ぶ
辛い奉仕でも幸福を得られる

短い人生です。ぼんやりと毎日をごささないようにしましょう。一念が偏ったり、一時の怠惰は貴重な時間を浪費することです。「無常」は影のようにつくってくるので、平安な時を把握して哀れみの情で苦難の人に心をかけて、喜捨の心で

衆生に心を寄せることです。つねに精進修行すれば慧命はたくましく伸びていきます。

《法華經法師品》に「聞妙法華經一偈、一句、一乃至一念随喜者、我皆與授記、当得阿耨多羅三藐三菩提」とあります。《法華經》は成仏の道ですから、ただ一句一偈吸収して用いると心は随喜を発し、すでに受けている真実法の種子は大変貴重なもの、ということなのです。

随喜には善の随喜があつて、また悪の随喜もあります。あまり了解していないこと、間違つたことについて言いふらすのは悪の随喜で、一人が真実でないこと

を話せば、万人に真実と伝えられ、往々にして人禍を引き起こすことになりません。正しいことはやればいいということが善の随喜です。善を見て随喜があらわれるということは、心田に一つの善の種を植えたことになります。ただしその心田を耕さなければ、無明の雑草が生い茂って習気^{じっけ}が深く重くなると、人とい縁を結ぶことができなくなつて、この善の種は雑草、砂、石に覆われて成長することができません。常に心田を耕し、無明の雑草を取り除くと蒔いた種は芽を出し、深く根を張れば一生無量です。人には両手しかなく、この世を浄化さ

せる目標を達成するまでには力足らずなため、多くの人の発心と参与が必要になります。人々は仏性の具わっている未来仏ですから、お互いに尊敬しなければなりません。困っている人に会ったときは、仏心をもつて労うことです。皆が善随喜を見て、法を聞いて、説法、行法ができるよう願っています。命の長短は何人もはかり知ることはできませんが、しかし広さと深さは自分で切り開くことができます。精進には深度があつて、広く善縁を結ぶと広く展開します。

一九六三年、私が印順導師に帰依した時、導師は私に「仏教のため、衆生のた

め」というお言葉を下さいました。その刹那、私は命のある限り、奉仕に身を尽くす決心をしました。五十三年間、どんな挫折や厳しいことにあつても甘んじ、歓喜心を持って向き合ってきました。そして、この一生限りでなく、来世また次の来世まで引き続き奉行することと。

慈濟設立以来、毎月の旧暦二十四日は静思精舎の配付日です。花蓮地区に住んでいる長期ケアの家族に補助金と白米を配付する日でした。創立当時から、精舎ではこの日に薬師法会を行っていました。その時は法会の後、おじやをふるまい皆は満腹になつて帰っていきました。

経済的に困難な頃の精舎は、たとえ米や食用油がなくても普明寺から借りておじやを作っていたのです。

ある配付の時、配付用の米袋が破れて床にこぼれた米を、功德会に参加して間もないボランティアの静蓉が一粒一粒拾つて台所の米びつに入れようとしたのを見て、私はこれは基金会がケア家族のために買つてお米だから、たとえ一粒でも精舎の米びつに入れてはならない、公私の別は明らかしなければいけないと注意しました。

静蓉は不思議に思つて、「さつき炊いたおじやのお米は精舎のお米でしょう。

それだったら私たちが食べているのは尼僧のお米ではありませんか？ それならば精舎では「ご飯を頂けません」と。そこで配付が終わった後、みなに仏典の中のある話をしました。

民をこよなく愛する慈しみ深い王がいました。深刻な日照り続きで、土地はひび割れ草さえ生えず、まして五穀などの収穫などありませんでした。そんな状態で飢えに苦しむ民を見て、王は大臣たちを引き連れ海辺へ雨乞いにいきました。しかしながら七日のお祈りにもかかわらず、酷暑の青空には雲一つ現れません。

国王は日増しに衰えている国民の飢えを見て、魚になって民を飢餓から救おうと願を立てられました。そして海に飛び込むと、間もなく大きな魚が潮の流れとともに岸辺へ打ち上げられてきました。岸辺で船を修理していた五人の人たちは、「村へ行って人々にこの肉で飢えを凌ぐように言ってもいいでしょうか」と。魚は承諾して「私は未来に終行を終えて成道した時、あなたたち五人を弟子とします」と言われました。

この国王が過去世においての仏陀で、五人の弟子は仏陀が鹿野苑において初めて法輪を廻した時の五人の比丘です。

仏陀は我が身を捨て衆生を済度する発願をなされて、生生世々その御身を衆生に供養されたのです。私は皆にこの話をしました。仏陀はこの大願をされましたが、仏弟子である私たちにできることでしょうか？ 私の創立した慈済は「佛教のため、衆生のため」を理念としています。静思精舎の出家尼僧たちが、自力更生を貫き衆生に利益しているのは、私たちの発心立願です。

慈済の立願から半世紀、この精神と理念は不動でした。私は知恵と法水を差し出して、慈済人が衷心から奉仕していることは、真心より私に供応していること

になります。私たち師弟の間柄は浮き草のような縁ではなく、それは「法髄縁」、骨髓まで深く沁み入った法の縁です。

皆さんがいつも立願している「生生世世師匠に追従する」「生生世世とも菩提の中に」は私たち師弟の間に交わされた約束です。この約束を達成するには、この生涯においては真面目に法を聴き真面目に奉仕して私と深い縁を結ぶことです。来世また次の来世にもこの願力を生活の上に定着させ、世間では人心浄化の使命を継続することです。

一念を守り

周守一

さまざまなことが起きる人生において、慈善の仕事に携わることは容易ではない。

しかし周守一は根気よく続け、少しもおろそかにしない。

◎文・楊舜斌／訳・慈願／撮影・黄筱哲

プロフィール：1953年生まれ。

1997年慈済委員の認証を受ける。

訪問ケア経歴：15年

訪問ケアの秘訣：訪問対象者には経済的な援助を与えるだけでなく、長期間にわたる訪問によって、対象者のニーズを理解し、助けます。

周守一は衛生福祉課台南病院のリハビリ病室に入るや、ベッドに寝ていたアサイさんに声をかけました。「アサイ、ご飯を食べた？ 良くなったら来週から静思堂で慈済のご飯が食べられるわよ」。ア

サイさんが入院する前に参加していた毎月の慈済食事配付活動に参加できるように、励ましました。アサイさんは脳の怪我で反応が鈍くなっていますが、両手を合わせて「感謝します」と答えています。

アサイさんはかつてお金を儲けてよい暮らしを送っていましたが、金使いが荒い上に気性が激しいために、家族との折り合いが悪くなり、離婚した後は息子と二人暮らしです。急性脳卒中に倒れた後、平衡感覚を失い、入院して一月の間リハビリ治療を受けて、やっと杖について歩けるようになったのです。



慈済台南支部で訪問ケアボランティアの幹事を務める周守一は、仲間のボランティアとともに三年近くアサイさんに付き添って、低所得家庭の証明書の申請をしている中で、家族との折り合いが悪かった過去を知りました。そして、病院で世話してくれる医師、看護師たちや、家族に対して感謝しようとする導き、アサイさんの心にあるしこりが徐々に小さくなっていききました。息子も、ボランティアに付き添われて慈済の夏季キャンプに参加するようになり、朗らかになりました。

六十四歳になる守一は慈善活動に参加

して十五年の大ベテランですが、「私はそれほど多くのことをしていません。そばにちよこつと入った具材のようなものです」と謙遜して言います。毎回の訪問ケアでは先輩として若い人たちにアドバイスや励ましを与え、「毎回訪問ケアを終える度に、自分の幸福を再認識し、もっと奉仕に励まなくてはと感じさせられます」と話します。

怨まずに努力すること

六十年前に、病気がちの父親が母親と四人の子供を残して亡くなった時、守一

は四歳でした。母親は仕方なく子供たちを連れて実家へ戻りましたが、雨風をしるぐに過ぎない粗末な家でした。幼い時の印象では、母はいつも病床に臥していました。小さな田畑はあったものの、当時の子供たちでは耕すこともできず、人に借して得たわずかな収入で暮らしていました。

二人の姉と三歳違いの弟がいて、姉たちは小学校卒業と同時に家計を助けるため紡績工場に勤めていました。守一も姉たちと同じ道を歩くものと思っていましたが、小学校の教師がこんな優秀な成績で進学しないのは惜しいと、三度家へき

て母を説得し、中学へ進学することになりました。

守一の成績は先生の期待に背かないものでした。一年目の学費は政府から学費補助を受けていましたが、その後は毎年奨学金を得るようになり、家にはずらりと賞状が飾ってありました。卒業後は樹人高級薬剤職業学校に合格しました。

しかしながら専門学校の学費は少額ではありませんでした。姉たちが家の心配をしないでしっかり勉強するようにと励ましてくれましたが、母が反対し、二年で休学して就職しました。それでも彼女は母を怨みませんでした。当時の田舎で

は「女の子は才のないのが徳」とされて
いましたから。

専門学校で学んだ薬剤や医療の知識を
生かして皮膚科診療所で働きました。注
射もできたので、収入は紡績工場の給料
よりもはるかに多くなりました。その
後、親戚の紹介で大きな会社の会計士に
なり、そこでも能力が認められて活躍し、
やがて知り合った楊忠正と結婚して円満
な家庭を築き上げました。

人生では

ただ二つのことがあるのみ

●周守一（一番左）は朗らかな笑顔でケア対象家庭
の訪問に出かける。チームで奉仕する機会は誰にで
もあると言う。



守一の母は熱心に貧しい人たちに布施
をしていました。お祭りが行われる時期
になると、大勢の乞食が村へやってきま
す。夜になると道端に寝ている人たちに、
家の廊下にながらせて温かいおじやを食
べさせ、身も心も温めてあげていました。

裕福な家庭ではなくとも、母の無言の
教えを受けた守一は人を助けることに喜
びを感じています。それに、家扶機構（
教育支援団体）によって学校で学ぶこと
ができ、今日に至ったことに心から感謝
していました。

以前、家扶機構の職員が自転車に乗っ
て家へ来て、学校の状況を詳細に尋ねま

●周守一は訪問ケアの際、苦難の人が何を必要としているか確認し、最も適切なサポートを行う。
秘訣は「その人の身になること」と言う。



した。一年間、一回三十分の訪問でしたが、愛の種が守一の心に植えられました。その後、守一は定期的に家扶機構の貧しい児童を引き受けて、自分が助けられたと同じように助けています。

彼女はお寺へもお参りして布施しています。ある時、市場でこんな話を耳にしました。花蓮のお坊さんが人助けのため、病院建設の浄財募金をしていると。守一はすぐに募金して、慈済の会員になりました。そして慈済委員と一緒にカソリッ

●慈済の任務がない時には、託児所から連れて帰った孫と幸せな時間を過ごす。





●周守一と楊忠正夫婦。結婚生活で争ったことはない。夫に先立たれた後も、夫の応援を感じながら休まず慈済の道を歩む。

ク系の「徳蘭園老人ホーム」へシスターの手伝いに行き、シーツと衣服の洗濯を

受け持ちました。

専業主婦の守一はボランティアをしていることをはじめのうち家族に黙っていました。夫の出勤後に出かけ、午後子供を迎えに行ってから夜の食事を作っていました。そして慈済の古参委員について訪問ケアを六年間務めて訓練を受け、委員の認証を得て、家族にも応援されながら慈済の活動に励んでいます。

初めて訪問ケアについて行った時、ゴミの散らかっている暗い家の中に入った途端すぐ逃げ出したい気持ちになりました。部屋の中は異臭に満ちていましたが、古参委員は何でもないように家の中に入

ると、ベッド脇にある尿のツボを手に取り

つてトイレに流し、ツボをきれいに洗いました。そしてケア対象者の体を洗ってあげている間もにこにこ話しかけて、この年老いたケア対象者は慈済委員がくることを期待して喜んでいるようでした。彼女はこの体験で深く感じ入り、これから古参委員に倣って励むことを心に決めました。

休日でも訪問ケアに出かける彼女を、家族は応援しています。守一も家事を少しも疎かにしていません。ある日いつものように出かける時、守一は夫に「私の人生は二とおりなの。一つは家庭でもう

一つは慈済よ」と言いました。

人生の苦難が多い

一九九九年九月二十一日、台湾中部の南投県で大地をも揺るがす強烈な地震が発生し、二千人以上が死亡し、数万人が負傷しました。当時の台南は被災者収容地区となり、被災者が大型バスで協進小学校へ運ばれてきました。恐ろしさに眠れない子たちや嘉南療養院から運ばれてきたお年寄りたちに、慈済ボランティアが付き添い、守一たち訪問ケア班は、病院で負傷者や犠牲者の家族の付き添いに

当たっていました。

彼女は四カ月前に子宮筋腫の手術を終えたばかりでした。一日中忙しく駆け回って、家へ帰ると腹部に痛みを覚えましたが、やってきたことに喜びを感じていました。

二〇〇六年の冬、台南県楠西郷で発生した自動車重大事故の時、彼女は晩御飯の用意をしていましたが、成功病院に患者が送られているとの知らせを受けるとただちに病院へ駆けつけました。救急センターで傷の痛みに堪えている人に寄り添い、その手を握ってあげ、親身になって共に痛みをこらえていました。

靈安室に並んでいる遺体の傍では、悲嘆にくれている家族にお茶を上げて慰め、深夜二時まで付き添って帰りました。「苦難の多いこの世の中で、あれこれと気にする必要はなく、今は自分の幸せを大事にしなれば」としみじみ感じていました。

*

證嚴法師は常に、人生は無常であり、人に寄り添っている間にも、無常はいつ何時でも現れる、とおっしゃっています。

二〇一四年、夫は末期の大腸がん余

命半年と診断されました。二人で残された貴い命を、これからどう過ごそうかと話し合っていました。思いもよらず一月後に夫は亡くなりました。心の準備はできていたものの、悲しみを隠せませんでした。

夫は黙々と彼女の行動を支持し、後顧の憂いがないよう努めていました。告別式を終えてから数日後、気持ちの整理ができた守一は、福祉課から送られてきたケースに対し、夫の分まで力を尽くしました。

「大地にしっかりと足をつけて、毎日たくさんある仕事を通じて、慈濟との縁を大

事に結ばなくてはなりません」と言います。訪問ケア、造血幹細胞献血、慈濟教育志業の懿徳ママ（学生のサポート）、静思堂のガイドボランティアなど忙しい日々を送るうち、瞬く間に二十五年が経ちました。

自分の一念は慈濟を守護することにある、と心に刻みつけ、そして因縁を把握して、体が健康なうちに奉仕することと言っています。

（慈濟月刊五九四期より）

決して飲酒せずと誓う

◆ 新北市・許聰敏

二〇一五年六月、新北市汐止区の環境ボランティア、許聰敏さんを訪ねました。まず額の大きく凹んだ傷に目を見張りますが、それは昔「大酒飲み」と呼ばれていた時に酔った勢いでつくった傷だそうです。二十七年前の深夜一時頃、小雨の降りしきる中、彼はいつものように酔ったままバイクで帰宅する途中、トラックの後方の荷台に追突、頭蓋骨破裂の大けがを負ったのです。幸い命は助かり退院





毎日リサイクルセンターへ通う

できましたが、以前の形には戻すことはできませんでした。しかしそれでもまだ教訓を得ず、依然として酒があれば飲む生活が続いていました。今年六十五歳になる許さんは、父親が自分の飲み残した酒を彼に飲ませるような酒好きな人だったせいで、十歳の頃にはすでに飲酒、喫煙、ビンロウを覚えてしまいました。「私の一生のうちほとんどの時間は飲んでいただけだった。バイクや車の運転中も歩いている間も、意識は朦朧としていた。事故は二、三十回は起こしたかな」。こんな無茶苦茶な日々を送っていたという話を聞いても、とても信じられません。今の彼は分別があり、楽しそうに会話のできる人なのですから。どうやって五十年余りの長きにわたる飲酒生活から立ち直ったのでしょうか？ すべては彼をリサイクルセンターに連れ出した奥様のおかげなのだそうです。

数年前、事業が下り坂になった聡敏さんは、気持ちもふさがちになり、さらに



酒癖が追い打ちをかけて、家族は心配するばかりでした。なんとかして禁酒させる方法はないだろうかと周りの人が何を勧めても聞く耳をもたず、家族もあきらめかけていた時、奥様がたまりかねてこう言ったのです。「毎日何もしないでビンロウの店に入り浸るくらいなら、慈済のリサイクルセンターに行ってみましょうよ」。この一言が図らずも聡敏さんと環境保全とを結びつける縁になったのです。

聡敏さんはリサイクルセンターでは金属部品の回収を受け持ち、種類と材質ごとに分類しています。元々車の解体をしていましたからこの仕事には熱心にとりくみ、やり方も分かっていましたから、回収物が多い時でも一つ一つ丁寧に、丹念に片付けました。山積みだった回収物をきれいに分類し終わった時、心の中で言葉にならないほどの喜びと達成感が生まれました。

聡敏さんは以前足を怪我し、歩くことが不自由でしたが、毎日バスで汐止のリサイクルセンターへ通っています。三階の自宅から階段を降り、バス停まで歩く、普通の人にはたった数分の距離ですが、彼には倍以上の時間がかかります。それでも通うことをやめません。たとえ土日であろうと、台風で雨が降ろうと、休むことは

なると表情を曇らせます。「誰からも避けられていたし、自分でももう立ち直れない
 と思っていました。リサイクルセンターで仕事をさせてもらえるなんて夢のようだ
 よ」。ここで作業を始めてから「努力し、学ぶこと」を教えられたそうです。ほか
 のボランティアがいつも彼を見守り、導いてくれたのです。大声で話さなくても聞
 こえているから穏やかな話し方をするように、他人にも関心をもって縁を結ぶよう
 にと、みんなが彼に向き合い、まるで杖のように心の再起を支え祝福し続けたので
 した。まだ禁酒ができていなかった最初のひと月の間のこと、誤って転倒した聡敏
 さんは大腿骨に大けがを負ったのです。その時、魏麗蘭さんというボランティアが
 四つ足のついた杖を準備してくれました。治療の間はボランティアたちがいつも励
 ましてくれました。まるで一度に家族が増えたような温かさに包まれたのだそうで
 す。そのことがあってから、彼は二度と酒を飲まない、これからの人生をリサイク
 ルに打ち込もう、と心に決めたのです。

ありません。「今はただリ
 サイクルの作業ができる
 だけでとても満足なので
 す」と喜びに満ちた表情を
 たたえています。

再起の支え

以前の聡敏さんは短気
 で気が荒く、いつも大声で
 どなり、口汚く人をのし
 り、自分が人を傷つけてい
 ることにさえ気がついて
 いませんでした。昔の話に





みんなを家族のように思う

リサイクルセンターの人々は学歴が高いのでも専門家でもありません。隣に住んでいるお婆さんもいますし、雑貨屋のおばさんもいます。故郷にいるお年寄りと同じ普通の人たちなのです。ですが、その心は輝いています。自分の時間を環境保全の作業に使い、善の心を磨き、愛を以て人に接し縁を結んでいるのです。一生を酒浸りで朦朧としたまま垢にまみれて過ごしていた彼は、本来の自分に目覚めました。もう一度やり直す希望を見い出して訓練を受ける時、彼はみんなに言いました。「ビシロウもたばこ酒もやめました。それでもまだまだ改める所がたくさんあります。努力していきます」。今年認証を受けて慈誠隊員（男性ボランティア）となった彼に、改めて「初心忘れるべからず」と祝福したいと思います。これからもリサイクルセンターで精進してほしい、そして彼の人生に学ぶ人々が続くことを願っています。



愛の心を広めれば 善の力が倍增する

愛の心と善の行いは、人間にとって最も貴重な宝であり、相互に啓発し導かなくてはなりません。

台湾の宝を大切に

「台湾において民衆の愛と善の心持ちは、とても貴重な宝であります。しかし、

◎文・釋德侃／訳・心嫻

それを環境により啓発しなければならないのです」と證嚴法師は客人に話されました。

五十年前の慈濟は、純朴な花蓮で多くの主婦の口伝えによって発足しました。市場で「竹筒歲月」という慈善の精神と作法を導き実行し、日々善の思いを心がけて、わずかながらでも貯金をするように呼びかけていたのです。時間が経つにつれて慈濟は大きく成長し、慈善活動の場は海外へと広げられました。台湾の愛の心と善行は世界に知れわたっていったのです。

「慈濟ボランティアは、すべての衆生を身内同然と思っています。愛を広めて互いに愛し合い助け合って、菩薩の道を歩んでいきます。このような心がけは、今も昔も変わりません。世の人々の苦しむ声を聞けば、助けに駆けつけていつて奉仕をしますが、決して見返りを求めません。ボランティアはまさにこの世の菩薩です」と證嚴法師は称賛されました。



一九九四年にアフリカのルワンダでは人種問題に端を発する虐殺が起きました。命を守るため大勢の人が逃げ出し難民となりました。難民キャンプでは物資が欠乏して、伝染病が広がったため死者の数はうなぎ昇りとなり、国際的な人道支援が必要となりました。

慈済はフランスの世界医師連盟と取り組んで、花蓮慈済病院の医師も支援団とザイルの国境にあるゴマという町に医療ステーションを設置しました。難民に医薬品を提供したり、施療や栄養の補助をしたりしました。

当時、「台湾人は、世界が保護すべき動物を食用にしている」という台湾の印象を傷つけるようなニュースが国際社会に流れました。この時、何度も慈済と協力して活動してきた世界医師連盟のメンバーは、台湾についてのよい印象や慈済が国際支援に尽くしてきたことを述べ、台湾を擁護してくれました。台湾の愛と

善を国際舞台に推し進めたのです。

「善の行いは互いに啓発し、導くことが大切です。他人の善行を見て歓喜の心を生じ、賛嘆するだけでも功德があります」と證嚴法師はおっしゃいます。「台湾のメディアが人びとの心を清めるような報道し、愛の心をさらに広めてゆき、善の力が倍增されれば、台湾の宝といふべき大愛が世界の人々に知れ亘ることになるでしょう」と切望しておられます。

「ろうそくを一本灯せば、その一本がまた他のろうそくを灯すこともできます。そうすることで一本目のろうそくの光が弱くなったりすることはなく、むしろ灯されたたくさんの方々のろうそくが周囲を明るくするのです」「善の行いは一人では力が限られています。ですが、もつと大勢の人を導き率いれば、凝集したその大きな力がより広い範囲で、もつとたくさんの方々を支援することができるようになるでしょう」と證嚴法師は説明されました。



愛を以て、人びとの心の中の灯火を灯して、善の本性が啓発され、おだやかな心ある人間となるのです。豊かな国と平穏な社会になれば、人びとは安心して暮らすことができるでしょう。

成仏の道に力を尽くす

慈済設立から五十周年を迎えるのを前に、各地からのボランティアは連日のように心の故郷である精舎に帰ってきて、朝山（仏への最高の敬意を表す礼拝。精舎に向って念仏を唱えながら三歩歩き頭を床について礼拝する）の活動に参加しました。また常住僧侶の作業を手伝ったり、寿饅頭を作ったりもしました。「慈済は皆がいるからこそ、愛の道を歩んで、途絶えることのない情を延々と衆生に注ぐことができるのです。皆がこの因縁を大切に、道心をしつかり持つように。将来何度目の五十年を迎えて

も、皆は心一つに、生生世世菩薩道を歩んでいきますように」と證嚴法師は皆を励まされました。

「世を救うためには、仏法はよい薬方ですが、仏の道は人を率いて行うべきです。成仏への道程は菩薩道にあり、そして究極の目標は仏となることです」「日々仏法を聞き、より多く心ある人を導きましょう。続承した法脈を永遠に、慈済の精神を代々に伝承していきましょう」と諭されました。

二百人以上の台南のボランティアが朝山のため精舎に帰ってきました。證嚴法師は、「菩薩に成し遂げるには、安定した恒常の心構えを持たなければ、無餘修、無間修、長時修、尊重修が得られません」「無餘修というのは、心は外のことにはずれず志を致して、諸々の悪行をせず、諸々の善を行うように。無間修、初心を恒久に保ち、利他の行いを絶えず実践しましょう。長時修とは、一念発起すれば、仏の心と師の志を以て一步一步前進するこ



とです。そして敬虔で尊い心で、聞いた仏法を實行しようと努めることが尊重修なのです」

證嚴法師は、皆が愛を以て慈濟の志業を護持していることに感謝されました。「これからは無数の五十年を迎えます。皆が仏法をしつかりと心に、生生世世志を固く一つにして邁進して参りましょう」と呼びかけられました。

（慈濟月刊五九四期より）

民情について

問い：「労働者と雇用者の対立の問題は、どのようにして解決すればよいでしょうか」

以前の人は生活のために働いていましたからが失業することを恐れていました。けれども生活の水準が向上したことによって、今では雇用者側が、せっかくの事業を棒に振ることになりはしないかと心配するようになりました。立派に事業を経営するには、私は『理事長』でお前は『職員』だといった気持ちをなくさなければなりません。

【即時問答】

慈濟大事記六月……………

訳・済運

06・04	◎エクアドル地震で慈済は6月1日からマナビ省カノア町とマンタ市で中長期支援に関する調査をすると共に、首都キトで華僑を対象に愛を広める活動を行った。慈済のエクアドル地震被災者に対する緊急支援第
-------	---

06・05	一段階は4月27日から行われ、6月4日に終了した。参加したボランティアは延べ490人である。 ◎国連NGO広報室執行委員会のブルース・ノッツ議長が4日、教育視察団を率いて慈済大学を訪れた。卒業式で世界人権宣言の平等観について講演し、673人の卒業生は共により良い社会を作っていこうと心に留めました。 ◎インドネシア慈済人医会はジャカルタ北部のコーラル静思書軒でケア対象の81人に内科と歯科の施療を行った。 ◎ベトナム中部の6省が早魃に見舞われ、人民援助調整委員会は慈済ベトナム支部に支援を求める書簡を送った。ベトナム、台湾、マレーシアの慈済ボランティアはこの日、ビンチ省バトゥリ県のアンデ小学校でアンシェ区とアンデ区の被災者1637世帯に、飲料水、米、バケツなど
-------	--

06・11	06・10	招待を受けて宗教処職員の施雅竹が出席、慈済の精神理念と慈善活動の経験を講演した。 ◎慈済基金会は苗栗県苑裡高校、公館中学校、後龍中学校、造橋中学校、后庄小学校、六合小学校の6校の「減災工事」（災害予防のための老朽建築物の建て替え工事）を引き受けることになり、この日、林碧玉副総執行長が代表で徐耀昌県知事と合意書を取り交わした。 中国福建省龍巖市連城県では2015年7月の豪雨で数多くの学校校舎の基礎建築が損壊したため、慈済基金会は教育局の要請を受けてこの日、連城県慈済幼稚園の支援建設合意書取り交わしと起工式を行い、ボランティアの薛明仁と李正鴻教育局長が署名した。 マレーシア、ペナンの慈済ボランティアはロヒンギヤ難民教育センターを訪れ、2棟の3階建て建物にカーテンを取りつけると共に、センター
-------	-------	---

06・08	06・06	の生活物資を配付した。 ◎ミャンマーのグランドハント病院の創設者であるハティ・ミント氏一行が台北慈済病院を訪れた。双方の病院は協力関係の合意書を交わし、人員養成や医療技術及び管理に関して意見交流をする。 ◎中国四川省の慈済ボランティアは徽記食品産業有限公司の要請を受けリサイクルセンターの立ち上げに協力し、この日「徽記環境保全センター」の起用式が行われた。そこは四川省で慈済が初めて企業内に設置したリサイクルセンターである。 ◎タイのチュラロンコン大学アジア研究学部とタイ永続発展基金会などがタイ国王即位70周年の祝賀行事として、ダシットタニバンコックホテルで「アジア永続発展への挑戦討論会」を催した。慈済基金会は
-------	-------	---

06・12	の校長先生と静思語教育の導入について話し合った。 北区慈済人医会は新北市勞工局及びマニラ経済文化事務所と共同で催した「フイリピン建国118周年記念花のカーニバル」の一環として、新北市政府は外国人労働者に無料の健康診断を行った。	
06・17	◎タイ・バンコックのチドロム区の観光客が多く訪れるエラワン寺院で2015年8月17日に起きた爆弾テロ事件で重傷を負った張道源は、タイ慈済ボランティアの継続した付き添いと各方面からの支援の下、何度も手術を行い、この日晴れて退院して台湾に帰国した。 ◎慈済基金会は17日から19日まで中国福建省廈門国際会議展覽会場で第1回海峡兩岸伝統産業展覽会に参加した。慈済は4大志業を紹介するほか、「年齢を重ねると3つの良いことがある」と題し、年配ボラ	

06・18	ミャンマーのクワントテ寺院は貧困家庭の子供たちのために学校を設立したが、政府や企業からの支援がなく食糧不足に陥っている。情報を受けた慈済ボランティアはこの日、同寺院に4トンの米を送り届けた。		
06・20	フランスは5月8日から大雨に見舞われ、過去100年の1カ月の降雨量が最高を記録した。ロワレイ地方とロワシェイ地方に被害が集中した。慈済ボランティアはアメリカ本部職員のコニールの協力によりサイブルブリ市長と話し合い、この日同市で24の被災世帯に緊急見舞金を配付した。		
06・21	慈済科技大学の情報科技学部と管理学部はそれぞれエジソン科技公司と慈済伝播人文志業基金会と研究協力関係締結の覚え書きを交わし、学生に3Dプリンター技術とシステム開発などの情報科技に関する実習の場を提供することになった。		

慈濟

2016 年 7 月 15 日 発行・235 号

中華郵政台北誌字第 909 號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈濟基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路 2 号
編集 慈濟日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



貴方はどのような方法で政府の慈濟に対する協力と支持を取り付けたのですか？

何もありません。ただ真面目に事を進め、絶え間無く努力してきました。時間の経過と共に誠実の結果が累積しただけなのです。